

四季の彩り豊かな中央大学の多摩キャンパス。正門から続く坂道を上ると、その威容を背景に立つ、二体のブロンズ像に気がつく。製作者により「蒼穹」と命名された青年像である。この像は、はじめ駿河台校舎の中庭にあり、多摩移転にあたり現在地に移設された。本年、建立60年を迎えるこの像は、如何なる来歴を経て製作・建立に至ったのか。そして、どのような人間模様があったのか。ここでは、青年像を巡る歴史的側面に着目し、その誕生の軌跡に光をあてたい。

一学生の異議申し立て

発端は学生の行動だった。1958年、岡本明久(当時法学部生)は、中央大学新聞500号を記念して企画された学生歌の歌詞募集に応じ、一席の栄誉を得た。それが「今こそ集いて」である。そして、賞金1万円を基金として、「いまあたらしく、再出発する中央大学の象徴として、雄々しく力強い、わたしたちすべての肖像ともいえる」、「中大の像」建立を、中央大学新聞の紙上で呼びかけた。岡本は、受験のために上京した中央大学のコンクリートの校舎と中庭に「何か拒絶する冷たい心証」を感じたという。それは入学後も変わらず、「数知れぬ落着かない表情の学生群が」溢れるキャンパスに違和感を持ったとも。「何か欠けている、人間的なスピリチュアルな何かが必要だ!」という怒りにも似た思いが、根底にあったのであろう。岡本にとっての青年像は、「青春の折りと叫びを託したものだ」のだ。一学生による密やかながら力強い異議申し立ては、やがて大きなムーブメントとなる。

立像運動の光と影

岡本の紙上アピールは学内に反響を呼び、1959年1月に像建設発起人会が結成され、同年4月には建設委員会が発足した。しかし、具体的な計画立案に難渋し、早くも10月には組織は解消される。そこで誕生したのが「青年像を造る会」だった。造る会は発案者の岡本を責任者に法学部クラス有志を軸として、自治会等の各団体が支援する形で結成され活動を始めた。活動は多岐にわたり、募金・廃品回収・映画会・音楽会等に取り組み、当初の募金目標額百万円を目指した(後に2百万円に修正)。中庭にドラム缶を置き、募金を呼び掛けることも試みた。この間、目標額に遅々として達しないことから運動の停滞が学内に囁かれるようになった。当時の中央大学新聞には、造る会の運動に批判的な記事も散見された。そもそも、多くの学生達の無関心が運動の周辺にあった。しかし、造る会に集った仲間達は諦めることなく4年にわたる活動の末に、それまで拒んでいた大学の資金援助(不足額88万円)を受入れつつも、所期の目標を果たすこととなる。



青年像を造る会(1959年10月)

本郷新と青年像

造る会の活動に共感し、製作に協力したのは、「わだつみ像」(立命館大学)などで著名な、彫刻家の本郷新だった。本郷は「岡本君の気持ちにほれ込んだ」と建設運動への賛意を示し、「青年像はそういう学生への大なり小なり精神的支柱になることは確かだ」と述べた。また、製作にあたり「本来人間の持っている健康的なものを表わしたい。希望に満ちているながら、変に力まず、意欲的な像にしたい」とも語った。ここに、一学生の異議申し立てに端を発した青年像の製作は、本郷という心強い支援者を得て、具体化の道を進んだのである。



本郷新(青年像の試作)1960年

1961年11月18日 除幕式の日

折からの降雨のなか、青年像は除幕の日を迎えた。発案者の岡本明久、造る会の有志学生達、製作者の本郷新、多くの参加者を得て式典は駿河台校舎中庭で開催された。その日、校舎の窓から拍手を送る学生の姿が多かったという。そこには、見えざる連帯意識が確かにあった。岡本はこの時、「青年像は新たな出発への一里塚である」と述べる。視線は既に運動の先にあった。なお、台座銘には「若人は語り合ひそして歩むのが好きだ」(作 新川亨)と記された。そして一、1980年、青年像は移設されるが、岡本と造る会の仲間達の志は、60年の幾星霜を経てなお、多摩の地に生き続けるのである。



除幕式(1961年11月18日)